

冰

2

2020

品牌盛典(品牌)



徒 跣 足

能村 研三

二月の一人旅

今年十月の「沖」創刊五十周年に向けて過去の「沖」の年譜を見たら、創刊間もない頃は同人、会員を問わず自らの意志で特別作品を応募する欄があった。勿論編集長の林翔先生の掲載の許可が必要であったが、同人会員が競って特別作品を出す時代であった。

私も、積極的であった若手作家の刺激を受けて特別作品を作ろうと一人旅に出かけた。その多くは二月の旅であった。その頃は役所勤めでも役職がついていない頃であったので、二月は連続した休みがとり易かったこと、何故か寒さの厳しい頃、しかも雪を見たくて旅することが多かった。特定の場所や素材を求めて旅をするよりも、二、三日一人にな

って俳句を作ることに専念したかったからである。

たった三日間であっても、家や性質という現実を離れ、一人で考えることは私にちつては貴重な体験であった。

裸木の瘤は沈思か黙考か
眠る山ねむらぬ川を宥めつつ
水を截る鯉の背鰭や年惜しむ
隠し味ある人とゐる年忘

障子貼さ中の寺を訪ねけり
縦一樹しるべとなりて雪を待つ
蒼みゐる根雪は踏まず穢さずに

凍滝は青筋立ちの阿修羅なり
一滴の水をよろこぶ初硯
しづかなる寒行僧の徒跣足

三十代始まる雪の旅一步
北塞ぐより深まりし北指阿医
豪雪がゆゑにたかぶる旅こころ

夜行列車に乗り、花巻の大畑さんを訪ね、雪の深い遠野へ旅したこと、一人冬の近江の余呉や琵琶湖を訪ねた旅、冬の吉野へ行き雪の奥千本を一人で歩いたこともあった。

こうしたことを思いついたのも、幼い頃から一人俳句の旅に出かける父の姿を見ていたからであろう。しかしまだその頃は、家族を置いて一人で旅に出かけてしまふ父が理解できなかつた。生活が困窮する中、それを黙って見送る母もすばらしかつたが、私の我儘な旅に理解を示してくれた妻もありがたかつた。

今は昔のような、我武者羅な一人旅など出来なくなつたが、自分の思いを自由に巡らす旅ができるようになればよいと思つている。

能村 研三

寒北斗 森岡 正作

松手入

昔の人の「冬来たりなば春遠からじ」という言葉を口遊んでいて、登四郎先生の「松手入すみ春への日数かぞへ見る」という句を思い出した。

日本人の暮らしと松の木は大変縁が深い。正月には松飾りや門松として使用され、盆栽にも好まれる。特に「松手入」が秋の季語であるように、庭木として多く植えられて大切にされている。

庭いじりも「松手入」ができて一人前と言われる。新しい葉が成長する秋に、余分な枝葉を剪り捨てて姿や形を整えるのは難しい。わが家にも古い木があるが手間暇がかかり、ずぼらな私には到底できない。数え日になってからやって来た、掛り付けの医者ならぬ植木屋に、「呆としていないで手伝え」と言われる始末であった。

早く春になって欲しい気持ちはあるが、季節の進行があまりに早く感じられるこの頃である。

曲がること嫌ひて折るる蓮の骨
古稀迎ふ背すぢ正せり寒北斗
海よりの日の這ひ上がる蜜柑山
暖簾出す女将の袂しぐれけり
水底にゐる寒鯉のいびきかな
鷹匠の眼に鷹の目の応ふ
山国の子をかどはかす冬夕焼



ぼつりぼつりと話して聞いて聞かぬ 大網 健治

楳とは、囲炉裏や焚き火にくべたりする木の切れ端のこと。楳火によって明るく灯される空間、燃える温かな囲炉裏を囲んでいると、いつしか心までほぐれてしまう。囲炉裏端で酒を酌み交わしているような情景だろう。くべ足すたびに強まる楳火に会話が続くが、その会話もせつつくようなものでなくてぼつりぼつり話して聞かぬの問合がよい。都会のせせこましさと違った独特の雰囲気の中での人との触れ合いである。大網さんは熱心にいろいろな句会に参加される方だが、今回の投句は粒が揃っていたのが嬉しかった。

東京は人渇く街冬木の芽 宮岡 弘

この句をみて「東京砂漠」という歌謡曲を思い出した。「ピルの谷間の川は流れない、ひとの波だけが黒く流れて行く」前川清の歌であるが、作者が言う「東京は人渇く街」とは、無味乾燥でそっけない人間関係、コンクリートに囲まれた潤いのない空虚な街という意味であろうか。ほんのりと温かみのある田舎暮らしに比べて、都会生活の味気なさを表現されたのである。そんな街にも街路樹は冬木の芽をつけていた。

綿虫やいつも心に感嘆符 根本 世津

「感嘆」という言葉、「感嘆の声」「感嘆のため息」などと使われる。ここでは「感嘆のため息」とマイナスイメージには解釈したくないので、「感心する、褒め称える」という意味として捉えることにしたい。綿虫が浮遊する中、俳句を志す作者は何事にも驚きと感心する心を持ち備えているのだろう。

日光を全て受けとる 福寿草 千葉 禮子

福寿草は縁起の良い花、おめでたい花として人々に愛されている。寒い冬の日、その鮮やかな黄色い花を見ると、幸せな気持ちになる。千葉さんは青森の方であるが、雪に覆われ日照時間の少ない地方であればこそ「日光を全て受けとる」といった表現になるのだろう。新年の目を存分に浴びてきれいに花を咲かせてくれた。

畏みて冬野の黙に入りけり 小倉 征子

まさに一人の俳人として冬野に佇む姿が浮かんでくる。しかし何気なく冬野に一人飛び込んだわけではなく、上五の「畏みて」という措辞から、自らの心を清め強い孤独に心身を浸し、黙したまま静寂そのものの冬野に身を置いたことが窺える。

冷まじや砂に埋もれし 古代都市 角口 秀子

日本に住んでいる私たちはこんなスケールの話は中々想像しにくい、都市全体が砂に埋もれて消えてしまったことがある。北アフリカのヌミディア地方に丸ごと姿を消した都市があった。古代ローマ皇帝トラヤヌス帝によって建設されたティムガットだ。千年後に英国の探検家によって発見された。

能村登四郎の軌跡〔18〕

能村 研三

花合歡の醒むる刻さへ妻醒めず

『天上華』昭58

母が脳腫瘍と判明し、一度目の手術をしたのが昭和五十年の冬。幸い良性の腫瘍であったので、すぐに悪化することはなかったが、腫瘍のできている位置が他の機能に影響を及ぼすことが心配された。奇蹟的に一命はとりとめ、不自由ながらも自宅での療養生活を送ることになった。この間に私は結婚し三人の孫を母に見せることができた。発病から八年目、病気が悪化し医師からは再手術を勧められ、一度は躊躇したものの結局指示に従うことにした。しかし術後十五日間眠りから醒めることはなかった。

一度だけの妻の世終る露の中

『天上華』昭58

七月二十八日未明、母が亡くなった。病院から危篤の報せがあり父と駆けつけたが、もう息はなかった。手術後意識のないままICU治療室へ毎日見舞に行っていたが、母との会話は無く毎日が臨終に立ち会っているようであった。登四郎は「命終の言なきもよし夏の露」の句を作っているが、遺言らしいことも全くのこすこともなく逝ってしまった。登四郎は「明治生れの男は女性に愛を示す方法はまるでできない。妻は私が最初に知った女でしかも最後の女であった」と述べている。

朴ちりし後妻が咲く天上華

『天上華』昭58

母の亡骸は登四郎に付き添われて自宅に戻ってきた。庭の朴の木が重たげに緑の葉をつけて、夏の強い日差しが焼けつくような日であった。通夜、葬儀共、自宅で執り行ったが、二階まで生長した朴の木がその一部始終を見守ってくれた。いつも一緒に見上げていた朴の木であるが、今は一人花の終ったあとの朴を見ている。天上の妻が華として咲き現れるようだ。美しく切ない鎮魂の詩である。この句は私の自宅の庭の朴の木のそばにある燈籠に刻まれており、自宅にある唯一の句碑である。その脇には彫刻家の植木力さんが母を偲んで作ってくれた石の仏様が安置されている。

身を裂いて咲く朝顔のありにけり

『天上華』昭59

この時期の登四郎の作品は、ものの裏側までしっかりと疑視し見通すような凄まじい詩性により、句に幅の広さと新しさを生み出していった。朝顔の蕾が左巻きに螺旋を猫くのに対し、右巻きに捻れているが、この捻れがほどけるようにして開花するのを、登四郎は「身を裂いて咲く」と表現した。人の血の滲むような生き方に心を惹かれた登四郎は、この句に自分自身の作句資勢をも重ね合わせている。登四郎は「自分を常に主題にして俳句を詠んでいる私は、ある意味で身を裂いて咲く朝顔なのかも知れない」と述べている。



蒼茫集



数へ日 甲州千草

瞬の炎

藤原照子

街路樹の冬木に男気のありぬ
ふみさとの近づいて来る年用意
*数へ日の客上らずに帰らずに
大冬木察知能力研ぎすます
廃材に役目を与ふ年の暮
冬の噴水風にはらりと日にとろり

*鱸酒の瞬の炎こころ灯しけり
炬燵の座占め取つときの針仕事
文字を追ふ余力は宝冬ともし
人工知能の圏外に生き返り花
一人用土鍋の月日柚子しぼる
霜育つ真夜や言葉をはぐくめり

無重力 宮内とし子

漆黒 辻美奈子

暖房車赤子はひとり笑ひして
*無重力とは綿虫の漂へる
北陸の魚のきときと爛熱し
禅寺の日の透くあたり雪ばんば
極月や鶏小屋の網新しく
「い」を「え」とは越後の訛のつぺ汁

*レコードの漆黒に針レノンの忌
ピラカンサ電波混線して届く
黙りをる記憶ばかりの焚火かな
白鳥に胸板といふありにけり
ポストには雪の匂の招待状
栗色のピオラを肩へクリスマス

ランプシエード 栗原公子

*熟柿すふ力抜くとは生きやすし
冬瓜汁とらへどころのなき話
そこまでのつもりが遠し時雨傘
もうぬない人と語らふ日向ぼこ
神もたぬ我も歌ふよクリスマス
初冬やランプシエードに花と鳥

それより 菊地光子

広重のそれより細き夕時雨
晩年といふ白紙あり日向ぼこ
還らざる音を残して冬の滝
短日や頼りにならぬ糸切歯
オフィス街の冬を四角に切り歩く
*数へ日の手帖に文字のそそり立つ

明日の記憶 上谷昌憲

写楽の目 千田百里
波郷忌の都大路を歩むなり
義士の日の茶柱いつの間に倒る

*ぼろ市の隅でもの言ふ写楽の目
猪が走るよ平和な村のど真ん中
聖夜劇みんなに役の付いてをり
重ねたる夫婦茶碗や去年今年
鳥 瓜 大畑善昭
*熟れきつてわが良心の烏瓜
枯を来て地熱の蒸気柱なす
衝羽根はつひに根づかず山に雪
心地よき夢より覚めて尺の雪
赤松の貫禄雪の湯に浸かり
まだ成さぬ大事のありて冬銀河
*残照や明日の記憶のかへり花
六本木ヒルズ南面冬かげろふ
記憶力めつきり薄れ海鼠囃む
歳晩の銀座で啜るたぬき蕎麦
山茶花や何為してこの大屋敷
チルド室にて冬茄子となりみたり

潮鳴集



古墳の主

塙誠一郎

神の留守古墳の主は定まらず
茶の花や大山古墳の深眠り
くつきりと熊の爪痕宮柱
*嫌はるる勇氣は難し海鼠囁む
抜け裏の抜け道ならず酉の市

吾も一粒

本池美佐子

*象の足どすんと釣瓶落しかな
凧やビルに音なきハイビジョン
雑踏の吾も一粒星冴ゆる
底冷や書架に古りたる広辞苑
縫針に小春の光通しけり

山に雪

大矢恒彦

*円錐はどこも正面富士に雪
百畳に火鉢ひとつの読経かな
マスクして顔も心も略しけり
たたなはる山に神話や阿蘇の雪
魚屋の濁声にゐて年用意

寒満月

栗坪和子

冬菊のまだ濡れてゐる三島の忌
都鳥中村哲民日暮は町を遠くせり
寒満月原野の濁ることなかれ
*浦びとの舟を洗ふも年用意
冬風や日蓮さまの寺の海

沖作品



能村研三選

図書館の暖炉の薪のくづる音
ぼつりぼつりと話して聞いて櫓あかり
白富士の近くなりたり日短
ポイントを妻に勤労感謝の日
開戦日中村哲の棺帰る
東京は人渴く街冬木の芽
雪来るか湾刃鈍き日本刀
羅漢みな耳朶厚し落葉降る
列車もう走らぬ鉄路落葉駆く
日の温み薫りに変へて朴落葉
ちやんちやん言葉を真似て児は育つ
綿虫やいつも心に感嘆符
くつきりと山容見せて山眠る
ななかまど森は数多の湖抱き
枯園に枯れ色愛でて心足る

東京

大網 健治

神奈川県

宮岡 弘

福島

根本 世津

*みちのくの果ての尻屋や寒立馬
末の子の結婚きまる冬の虹
冬菊のびつしり群れて光り合ふ
室咲やロビーで開く独唱会
日光を全て受けとる福寿草
*ひとり碁の背を繕はず室の花
落葉踏む度に記憶を鮮明に
畏みて冬野の黙に入りにつけり
屈託や冬日の雀また来たり
笹鳴やこころに重き一書伏せ
*冷まじや砂に埋もれし古代都市
栗の毬図書館前の待ち合はせ
理由なき別れもありや木の実降る
ちちろ鳴く百万都市の空家かな
冬来る稜線しるき今朝の富士

青森

千葉 禮子

福岡

小倉 征子

千葉

角口 秀子